



人を殺すのが公務員の仕事

死刑制度のある日本

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」

東京都荒川区南千住 1-59-6-3002

<http://sobanokai.ny.coocan.jp/>

残虐な殺人事件の犯人の死刑判決が確定し、「正義が下された」と考える人は多いでしょう。しかし死刑制度があるということは、人を殺す職業が日本に存在するという事を意味します。

執行を行なうのは、死刑執行施設のある拘置所に勤務する国家公務員の刑務官です。死刑を専門に扱う部署は無く、執行担当者は死刑囚に矯正教育を行なう部署からも選ばれます。死刑囚同様、刑務官も執行当日に執行の担当を告げられます。妻が妊娠中、家族が病氣入院中、喪中などの場合は担当が免除されます。

執行当日、複数の刑務官が死刑囚を独居房から執行施設に連行します。執行を受け入れて別れの挨拶をする人、最後まで何を考えているのか不明な人、連行されることに力の限り抵抗し刑務官に無理やり引きずられていく人など、様々です。

日本の死刑は絞首刑で、目隠しされ後ろ手に手錠をかけられた死刑囚を執行室の床板の上に立たせ、両足を拘束し、天井から垂れ下がっている縄の先の輪に首を入れます。隣の部屋の壁に付いている5つのボタンを5人の刑務官が同時に押すと、床板が開いて身体が落下し、死に至ります。5人の刑務官がボタンを押す仕組みになっているのは、「自分が押したボタンで人が死んだ」という罪悪感を和

らげるためです。執行室の下の部屋には、落下した身体が揺れないよう抱きかかえる係の刑務官が控えています。窒息によるけいれんが十数分続いた後、医務官が死亡を確認します。刑務官数人で縄から身体を下ろし、失禁や鼻血の汚れを清めから用意された棺桶に遺体を収めます。

健康な人を無理やり殺すという仕事に、精神的に傷つかない人がいるでしょうか。しかし死刑制度がある限り、誰かがこの仕事をやらねばなりません。刑務官は、日々顔を合わせて言葉を交わしている相手を殺すのです。死刑囚が心から被害者の冥福を祈って更生していく様子を見ている場合は、特に過酷です。心を病む人もいますし、執行に関わった事を誰にも話せない人も多いです。業務として粛々と取り組むと考えている人でも、心の中に人を殺したという事実が重く残ります。執行業務が嫌で退職した人もいますが、仕事をやめられない事情の人もいます。

「凶悪な殺人犯は死刑になって当然」「遺族の気持ちを考えれば死刑が妥当」では、あなたは仕事として死刑囚を自分の手で殺害する事ができますか。感情的に「殺してやりたい」と思う事と、実際に殺人に関わる事は全く別です。死刑制度によって、あなたではない誰かに人を殺す仕事をさせているという事は心に刻んでおくべきでしょう。(K)